
はじまりのコトバ

愁しゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりのコトバ

【ZPDF】

Z5016E

【作者名】

愁しゆう

【あらすじ】

鎬木悠也は、男なのに学校のミスコンで優勝し、なぜかマドンナになってしまった。そんな悠也を妬んだクラスの女子から底づてくれた、井上一芳に惹かれて…。

(前書き)

女の子っぽいカンジの男子が一ガテな方は、読むのを避けてください。

たつた一言で、そのひとを好きになつてしまつたが、現実にあ
ると思つてなかつた。

全校生徒が好奇心こいつぱいの田で見つめるステージ上で、ぼく鏑
木悠也は、緊張とそのための吐き氣で足をガクガクと震わせていた。
ぼくの横に並ぶ四人はみんな女の子。
なぜなら、これは…

「では！今年の我が校のマドンナを発表します！」
毎年の恒例行事らしい…ミスコン、だからだ。
まかり間違つて推薦されてしまつたぼくは、それこそまかり間違
つて最終審査まで残つてしまつていてる。

男子の視線は揶揄、女子の視線は軽蔑。
それは小学生のころから変わらない。
だれひとり、ぼくをぼくとして見てくれない。
たとえ、外見がよかつたとしても…ひとりなら意味がない。

…気持ち悪い。はやく…みんなの前から姿を消してしまいたい。
けたたましく鳴るファンファーレも、ぼくには騒音にしか聞こえ
ない。

「満場一致で、一年C組鏑木悠也くんです！」

スポットライトに目が眩んで、さらに体調が悪化する。

クスクスという小さな笑い声と、わざとらしい拍手の中、司会者の生徒会長がマイクを向けてきた。

「一年二年のお姉さま方を差し置いての受賞…いまのお気持ちは？
…どうでもいいから、はやくここから降ろして。

「…嬉しいです。投票ありがとうございます」

「いやあ、新マドンナは慎み深いですね～」

ぼそぼそと決まり切つた言葉を述べると、生徒会長はあからさま

に揶揄つてきて、その口調にビビり、と体育館は笑いの渦に巻き込まれた。

「ぼくは、この学校のピエロだ。

高校生活も、きっと、今までと変わらない。

「男のクセしてマドンナなんて、バッカみたい」

教室のドアを開けた瞬間飛び込んできた声に、つい入口でそのまま固まってしまった。

喋っていた女子は、ぼくの姿を見ても別に悪いことは言つてないつて具合に睨んでくる。

リップグロスを塗りたくつたテカテカな唇と、合成繊維のバッサバサな睫毛、ふくよかなバストをした彼女は一次審査で落ちていた。きっと、自信があつたんだろうな。

彼女を取り巻く女子も、鼻で笑つたような表情だ。

そんなの、とうに慣れてる。

なるべく同じ中学のひどがいない学校を選んでも、結果はいつも変わらない。

だから、いいんだ。もうどうでもいいよ。

無言で自分の席に戻ろうとすると、誰かに右腕を掴まれた。

そのまま腕の先を見ると、アッシュグレーのメッシュが入つた前髪が目に映つた。

「井上くん」

右にふたつ、ひだりにみつ、ピアスをしてる彼、井上一芳は、ちょっとした有名人だ。

入学式には、きれいな女性にオープンカーで送つてもらつていて、毎日違う女の先輩を連れ歩いて、保健室の先生ともいろいろあるらしい。

友達がいないぼくの耳にも入つてくるほど、遊び人な彼の噂は入つてくる。

「なんだ、ちゃんと喋れるんだな」

なにも言わないから喋れないかと思つた、と口の端をあげて笑つて立ち上がると、くしゃくしゃとぼくの髪を搔き撫でた。

「こんなふうに触られるのははじめてで、なぜかドキドキと胸が騒いだ。

「やわらかい髪。田も畠も自然でこんな、なんだから、おまえらみたいなツクリモノの女が勝てるワケねえだろ」

「つーなんですって！？」

「あんただつて、その女をとつかえひつかえしてやるだしょー」

『ツクリモノ』という言葉に反応した女子が、一斉に井上に怒りの矛先を向けた。

ギヤーギヤー喚くな、としかめつ面をして耳を塞いだ彼は、なんとぼくの体を腕の中に収めてしまつた。

あ、タバコの匂いがする…。

「別にツクリモノが悪いとは言つてねえだろ？ が、ただ、こいつは本気で可愛いんだからじょうがねえつて話。あんまし僻むと性格歪むぜ？」

キーッ、つていう金切り声が聞こえてきそうなほど、彼女たちは顔を真っ赤にしている。

ああ、井上はぼくを庇ってくれたんだ。

見た目、不良？ っぽいけど…いいひとなんだなあ。

「…かわい、い？」

「可愛いからマドンナ様に選ばれたんだり？ もうと、自信もつてみるよ」

いま、ぼく…声に出してた？

自信、なんて…ぼくなんかがもつてもいいの？

目顔で問いかけると、彼は頷いて笑つた。

そして、もう一度くしゃり、と撫でられた頭が、なんだかとても熱くて…胸がきゅつとした。

放課後、日直で最後まで残っていたぼくは、担任から健康診断の

問診票を取つてくるように言われて、保健室へ行つた。

けれど、少しだけ開いたドアの隙間から、女性のか細い声が聞こえて立ち止まつた。

どうしたんだろう、と覗き込んで…そのまま動けなくなつてしまつ。

最初に見えたのは、保健の先生のすらうとした足と、その先で脱げそうになつた黒いハイヒールだつた。

「つ」

そして、その足を支えて体を密着させていたのは…井上だつた。彼は眉間に皺を寄せて目を眇め、僅かに開いた唇からは小刻みに呼吸の音が漏れている。

なにをしているのか、なんて、実際に経験のないぼくにだつて判つた。

見ていけないのに、どうしても目が逸らせなかつた。

しかも男なら、夢中になつて見るのは先生のはずなのに、ぼくの視線はずっと彼に縫いとめられていく。

頬を伝う汗と、息を詰まらせる声。

…そして、やわらかく弛緩していく表情。

「つ、は…」

気がつくと、全身にぐつしょりと汗をかいていた。身体の中心が熱を持つて苦しい。

どうしよう、どうしよう。

はじめて覚えた欲情、という感覚にすっぽりと飲みこまれてしまつ予感がした。

胸の奥底から溢れ出して、迫つてくるモノから逃げるよひに、ぼくは鞄も置き去りにして家まで全力で走り続けた。

それから、ぼくは井上を見ることができなくなつた。

彼を、ぼくの汚い欲望で穢してしまつたことが、いたたまれなくて…申し訳なくて。

それでも、どうしようもなく彼を好きになってしまっていて。この、芽生えてしまった想いと欲望を、どうしたら手放すことができるのかな…。

「あーっ、もうー・フ・ラ・レ・たー！」

教室中に響き渡るような声で叫んだのは、例のミスコン一次審査敗退の彼女だ。

「ま、これでスッキリしたんじゃないの？」

「そうだよねー。次行こうかー！」

…それは、あまりにもあつけらかんとしきれてるんじゃないかな。どうでもいいけど。

あ、そっか。フ・ラ・レ・れ・ば、少しは軽くなるのかなあ。

そうしたら、彼をぼくの中で、あんな目に遭わせなくてすむのかな。

ちらりと見た井上は、じにかつまらなやうに窓の外を眺めていた。

放課後、思い切って話しかけて、呼び出すことに成功したのは奇跡だと思つ。

『もつと、自信もつてみろよ』

彼のその言葉がぼくに勇氣をくれた。

それでも、緊張して足はずっと震えてるし、恥ずかしくて涙が溢れてくるのは止められない。

「ここにびとにしてください」

そう頭を下げると、彼はふうん、とぼくを観察してくるみたいだつた。

どんな表情をしてるのか確かめるのが怖くて、顔を上げられない。失敗した、かなあ…。

ここでフ・ラ・レ・ても、明日また教室で会うんだ。クラス中に、ぼくが告白したことが広まるかな…。

ううん、彼はそんなことをするひとじゃない。

だったら、最初からぼくなんかを底つたり、しない。

「ぼくで満足できなかつたら、浮氣しても…ここから
え…？なに、言つてるの…ぼく。

フランコ見たのに、そんな食い下がるよつな」と、ビリビリして言つ
てるの？

あつ、と思つて顔を上げると、井上は少し険しい表情をしていた。
ぼくが告白なんてしたから、氣を悪くした？

「そんな覚悟があるなら、まあいこよ」

けれど彼は、ぼくが予想してなかつたことを言つてくれた。
一瞬、なんて言われたのか判らなかつた。そのへりへ、信じられ
ないことで。

…ほんとうに？ぼくで、いいの？

「いびとこ、してくれるの…？」

「つ、嬉し…い…」

溜めこんでいた涙が、とうとう溢れて頬を伝つた。
はじめて好きになつたひとが想いに応えてくれる、そんな幸運が
あるなんて。

涙が止められないぼくの頭を、彼はその大きくてあたたかいで
ひらで、撫でて慰めてくれた。

言葉にできない想いが溢れて、ぼくは彼に抱きつくことでしか言
い表すことができなかつた。

彼と付き合つはじめて、ぼくは変わつたと思つ。

自分でも驚くほど、わがままぢゅうぢくなつた。

「カズくんなんか、大つ嫌い！」

ばつちーん！と彼の頬が大きく音を立てた。

浮氣は許したくないけど、最初に言つてしまつた手前、どうして
ももうやめて、つて言えない。

ウザイとか迷惑とか言われてフランコ…それこそ、死んでしま
いそつだから。

浮氣を知つて最初に平手で打つてしまつたときは、ほんとうに無

意識で、どうしようつって思つたけど、そのあとに彼はとひかそな

甘い言葉で慰めてくれた。

彼にとつてぼくは、もしかしたら毛色の違つおもひや、へりいな存在なのかもしけない。

けれど、いまは彼の瞳の奥にある、やせしに色を信じてる。

叩いても怒らない彼の気持ちが、ぼくだけに向けられることを願つてる。

「このローション、いい匂いだな」

カズくん（ちよつと恥ずかしい呼び方かな？）が、ベッドサイドに置いてあるボディローションを手にして、鼻をクンクンと動かしていた。

「うん、マンゴーつていい香りするよね。カズくんがぼくからするつて言つてる、甘い匂いつてコレでしょ？」

カズくんはぼくと付き合おうと思つた理由に、ぼくから香るひじい、甘い匂いもあつたと教えてくれた。

マンゴーの写真がパッケージの、そのローションは、最初は父さんが母さんの「機嫌」とりに買つてきたものだった。でも気に入らなかつた母さんに押し付けられて、そのままリパー

ト購入するほど愛用してゐる。

「いいや、違う。コウのはもっと熟れてる甘さつていうか…なんなんだろうな？」

「それはこっちが訊きたいよ」

ぼくがクスクス笑うと、カズくんがぼくを引き寄せ、髪に顔を埋めてくる。

「ん…、やっぱこっちのがいい匂い」

髪つてことは、シャンプー？でもフルーツ系の香りじゃなかつたはずだけどなあ。

髪に触れる吐息がくすぐつたくて、もうやめて、と彼のシャツを掴んだ。

「…あ、うん…」

すると、彼の唇がすつ、と移動してきて、ぼくの唇に触れてきた。最初はぼくの唇を堪能するように、自分の唇で挟んだりやわらかく歯を立ててきて、それからりゅうくつと、ぼくの口腔内に忍び込んでくる。

ぼくの、ぼつてりとした唇は、なんだかタラ「唇みたいで恥ずかしかったけど、カズくんはそれがいって言つてくれるんだ。

どうやら彼はそういうのキス好きらしくて、それこそまったく経験のなかつたぼくは、キスだけでぐつたりしてしまう。

「…は、あ…」

力が抜けでベッドに沈んだぼくの唇を追いかけて、カズくんが覆いかぶさつてくる。

「も、苦し…、やだ…」

「腹、減つてんだよ。もつと食わせろ」

そのやりとりの間も、彼の舌や唇はずつとぼくの唇に触れて離してくれないんだ。

それでなくとも肉厚なぼくの唇が、さらに真っ赤にぷっくり腫れるまで続けられる、甘い甘いキス。

意識が朦朧としてきて、恥ずかしい気分になつてくるナビ、まだそれ以上はない。

ぼくに合わせてゆづくつと歩んでくれている、彼の心が嬉しくて、けれどいつも胸が切なくなる。

あのね、カズくん。

ぼくはもつと、欲深い人間だよ。もつと、カズくんが欲しい…ぼくのぜんぶが融けて、ドロドロなつてしまつほど、深く愛されたい。

「カズ、くん」

「ん?」

「だいすき」

ぎゅう、と抱きついたぼく、彼はちゅうと膝むやっこキスをくれた。

(後書き)

続きがあれば18禁指定になります…。
年齢が到達してない方や、それ以上の描写が苦手な方はスミマセン
です…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016e/>

はじまりのコトバ

2010年10月8日15時44分発行